

# 佐渡島をフィールドにハーバード大学公衆衛生大学院でPublic Healthを学ぶ



新潟県厚生農業協同組合連合会 佐渡総合病院 初期研修医  
Harvard T.H. Chan School of Public Health Master of Public Health in Epidemiology

## 磯邊 綾菜

2022年3月に京都府立医科大学医学部医学科卒業。2022年4月より新潟県佐渡市にて初期研修を行う傍ら、ハーバード大学公衆衛生大学院修士課程に進学しPublic Healthを学ぶ。専攻は疫学。新潟県佐渡市の海外留学支援制度1期生。

はじめまして、磯邊綾菜と申します。私は日本海に浮かぶ佐渡島で初期研修医をする傍ら、ハーバード大学の公衆衛生大学院で疫学を学んでいます。どういうこと？と疑問に思われる方も多いかと思いますが、簡単に言うと医師として病院で働きながら主にオンラインで社会人向け大学院の学生をしています。誰かのお役に立てることを願って、この誌面をお借りして私の少し変わった留学の形を紹介しようと思います。

## 魅惑の課題先進地域、佐渡島

佐渡島は新潟県沖に位置する周囲約280kmの日本海側最大の離島です。2022年現在は、5万人ほどの人々が暮らしています。佐渡島に住んで半年が経ちましたが、私はこの島が大好きです。ジオパークにも認定されている興味深い

地形や豊かな自然や、人の手で美しく守られてきた里山、日本のさまざまな地域の影響を受けて独自に融合してきた文化はいつも感動を与えてくれます(写真1)。一方で、佐渡は高齢化率が40%を上回り、日本の20年先の人口構成を持つと言われる、医療・介護の課題先進地域でもあります。

## 佐渡島への移住と大学院進学の手

私は医学部卒業後の臨床研修先として、地域全体の医療を見渡し、幅広い経験を積める病院を探していました。また、学生時代に複数の疾患や社会的な問題を抱える患者さんたちと出会ったことから、病院の外にある医療の仕組みや人々の生活、環境の中での健康を考えるPublic Healthを学びたいと考えていました。自力で大学院に合格すれば、初期研修期

間中の留学を支援するという臨床研修プログラムが佐渡に新しくできたことを知ったのは2022年の8月。ちょうど医学部6年生として就職活動をしていた時期でした。離島で初期研修をやりながら海外大学院に進学することは先例がなく、大学院合格の保証もありませんでした。しかし、病院見学のついでに島を探検して、「こんなに面白い場所が日本にあったのか!」と感動したこと、佐渡島の中核病院で地域に根ざした医療を学べること、また、公衆衛生大学院での学びを踏まえて医療課題を解決する視座を身につけられるのではないかと考えたことが決め手になり、思い切って佐渡への移住と大学院進学とに挑戦することにしました。正直不安は大きかったです。自分が置かれる環境を変え、その環境でやるべきことに迫られればどうにかできるだろうと半ば楽観的に開き直すことにしました。

佐渡島で働くことを決めてから、怒涛の勢いで大学院受験の準備が始まりました。英語のスコアメイクやさまざまな書類の準備の面倒さには語り尽くせないものがありますが、色々な方のお力を借りながらなんとか12月の出願までの2ヶ月間で必要な書類を揃えました。幸運にもハーバード大学とジョンズホプキンス大学の2校から合格をいただき、私は疫学の分野に強いHarvard T.H. Chan Schoolに進学することにしました。その後、医師国家試験にも無事合格することができ、2022年4月、佐渡島に渡りました。



写真1 佐渡の風景。日常の中に自然の美しさを感じる瞬間がたくさんあるところが素敵です。



写真2 グループワークの課題やテスト勉強をした、Harvard T.H. Chan School of Public Healthの図書館。



写真3 ハーバードの同じクラスの学生たちと、校舎前でパシャリ。

## ボストンでの大学院生生活

医師として働き始めて2ヶ月が経った2022年6月からは大学院の授業が本格的に始まりました。私が在籍しているコースは2年間のカリキュラムとなっています。基本的に授業はオンラインで行われますが、2年間を通して6月の1ヶ月間はハーバード大学公衆衛生大学院があるアメリカのボストンでクラスメイトと顔合わせをして授業を受けるというスケジュールです。現地では世界中のさまざまな場所から来ている多様な学生たちと朝8時半から17時まで毎日みっちり授業を受けました。海外の大学といえば、芝生で学生が談笑しているイメージがあったので、「こんなに授業を詰め込むものなのか！」ととても驚きました。私にとってはこれが初めての渡米であり、授業中の発言やディスカッションへの貢献が評価される環境に圧倒され、知らない言葉で知らない概念を学ぶ難しさに直面する日々でした。放課後にはクラスメイトと寮や図書館で一緒に勉強したり(写真2)、夕食を食べに出かけ、さまざまな国や立場からの話を聞くことができました(写真3)。また、研究や学業のためボストンに滞在している日本人の方々にもお会いし、それまで自分の中で持っていたキャリアやコミュニティについての考えが変わっていく刺激的な時間

を過ごしました。

## 佐渡島で暮らしながら大学院で学ぶ

帰国後もオンラインで大学院生活は続いています。毎週課される課題やテストと仕事を両立するのはとても大変です。島では病院の中での研修に加えて、訪問看護ステーションや介護老人保健施設、保育園など、佐渡で人々の健康や暮らしを支える施設に向き、地域の課題を抽出する活動に取り組んでいます(写真4)。離島、都市、大学とさまざまな場所を行き来することで、目に映る景色と思考は大きく変化していきます。それぞれの場所で見えてくることはどうして生じているのか、どう新しく繋げていけるのか。離島で初期研修を行いながら大学院で学ぶことの最大の魅力は、島という医療資

源が限られた場所でいかに人を幸せにするか、大学院での学びをどう生かせるのかを考えるフィールドが身近にあることだと思います。ここで得られる視点は離島医療だけではなく、日本全体の医療政策や国際保健にも通じるものがあると私は思っています。

留学体験記ということで書かせていただきましたが、私の旅はまだ始まったばかりです。まずは佐渡をフィールドに、ヒトと他の生き物たち、我々を取り巻く環境が健やかに共存していくための方法を探っていきたいと考えています。留学に関して相談や質問のある方は、下記のアドレスにご連絡をいただければ力になれることがあるかもしれません。みなさん、是非島に遊びに来てください!

E-mail: [ayanaisobe@hsph.harvard.edu](mailto:ayanaisobe@hsph.harvard.edu)



写真4 訪問看護の利用者さんと、佐渡島にて。